

文学教材の研究―『竹取物語』の言語表現―

荻原 桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻
北九州市八幡西区自由ヶ丘一・一（〒八〇七―八五八六）
（二〇二〇年五月二十八日受付、二〇二〇年七月十四日受理）

はじめに

『竹取物語』は九世紀後半から一〇世紀前半頃に成立したとされ、平安時代初期に仮名によって書かれた物語の一つである。現代では『かぐや姫』というタイトルで、絵本・アニメーション・映画など様々なメディアで受容されている。

SF作家である星新一の現代語訳やノーベル文学賞作家である川端康成の現代語訳がある。また、原作を翻案した高畑勲監督のアニメーション映画「かぐや姫の物語」や松本零士のマンガやアニメーション映画「新竹取物語 1000年女王」など評価の高い作品がある。

・『竹取物語』星新一訳 角川文庫一九八七年

・『現代語訳 竹取物語』川端康成訳 河出文庫二〇一三年

・『新竹取物語 1000年女王』松本零士劇場版一九八二年

・『かぐや姫の物語』高畑勲監督 スタジオジブリ製作二〇一三年

成立年は明らかにならなっておらず、原本は現存せず、写本は後光厳天皇の筆とされる室町時代初期（南北朝時代、一四世紀）の古筆切数葉が最古といわれ、完本では室町時代末期の元龜元年（一五七〇年）の奥付を有する「里村紹巴本」、無奥書だが永祿・天正頃とされる「吉田本」が発見されているものの、いずれも室町時代を遡るものではない。

『源氏物語』が世界的に有名な物語であるにもかかわらず、日本人であっても全編読んだという人が少ないのに対して、『竹取物語』は子どもから大人まで、老若男女に親しまれてきた日本人の心の大本といえる物語である。

一、『竹取物語』について

『竹取物語』は、平安時代初期に成立した現存最古の物語で、成立年、作者ともに未詳である。竹取の翁によって光り輝く竹の中から見出され、翁夫婦に育てられた少女かぐや姫をめぐる奇譚であり、かぐや姫が人間的内面を形成していく過程が新しい表現の試みである仮名で綴られている。『源氏物語』「蓬生」では「末摘花の紛らはし」として、『かぐや姫の物語』が紹介される。

はかなき古歌、物語などやうのすさびごとにてこそ、つれづれをも紛らはし、かかる住まひをも思ひ慰むるわざなめれ、さやうのことにも心遅くものしたまふ。わざと好ましからねど、おのづからまた急ぐことなきほどは、同じ心なる文通はしなうちしてこそ、若き人は木草に付けても心を慰めたまふべけれど、親のもてかしづきたまひし御心掟のままに、世の中をつつましきものに思して、まれにも言通ひたまふべき御あたりをも、さらに馴れたまはず、古りにたる御厨子開けて、『唐守』、『貌姑射の刀自』、『かぐや姫の物語』の絵に描きたるをぞ、時々のみまざくりものにしたまふ。

古歌とても、をかしきやうに選り出で、題をも読人をもあらはし心得たるこそ見所もありけれ、うるはしき紙屋紙、陸奥紙などのふくだめるに、古言どもの目馴れたるなどは、いとすさまじげなるを、せめて眺めたまふ折々は、ひき広げたまふ。今の世の人のすめる、経うち読み、行なひなどいふことは、いと恥づかしくしたまひて、見たてまつる人もな

けれど、数珠など取り寄せたまはず。かやうにうるはしくぞものしたまひける。

また、『源氏物語』「絵合」では「物語の出で来はじめの祖なる『竹取の翁』と作者である紫式部に物語の「おや」と称揚され、光源氏が思慕した藤壺の面前で行われた絵合で『竹取の翁』対『宇津保の俊蔭』として登場する。

中宮も参らせたまへるころにて、方々、御覧じ捨てがたく思ほすことなれば、御行なひも怠りつつ御覧ず。この人びとのとりどりに論ずるを聞こし召して、左右と方分かたせたまふ。

梅壺の御方には、平典侍、侍従の内侍、少将の命婦。右には、大弐の典侍中将の命婦、兵衛の命婦を、ただ今は心にくき有職どもにて、心々に争ふ口つきどもを、をかしと聞こし召して、まづ、物語の出で来はじめの祖なる『竹取の翁』に『宇津保の俊蔭』を合はせて争ふ。「なよ竹の世々に古りにけること、をかしきふしもなければ、かくや姫のこの世の濁りにも穢れず、はるかに思ひのぼれる契り高く、神代のことなめれば、あさはかなる女、目及ばぬならむかし」と言ふ。右は、

「かぐや姫ののぼりけむ雲居は、げに、及ばぬことなれば、誰も知りかたし。この世の契りは竹の中に結びければ、下れる人のことこそは見ゆめれ。ひとつ家の内は照らしけめど、百敷のかしこぎ御光には並はずなりにけり。阿部のおほしが千々の黄金を捨てて、火鼠の思ひ片時に消えたるも、いとあへなし。車持の親王の、まことの蓬萊の深き心も知りながら、いつはりて玉の枝に疵をつけたるをあやまちとなす」。

絵は、巨勢の相覧、手は、紀貫之書けり。紙屋紙に唐の綺をばいして、赤紫の表紙、紫檀の軸、世の常の装ひなり。

「俊蔭は、はげしき波風におぼほれ、知らぬ国に放たれしかど、なほ、さして行きける方の心ざしもかなひて、つひに、人の朝廷にもわが国にも、ありがたき才のほどを広め、名を残しける古き心を言ふに、絵のさまも、唐土と日の本とを取り並べて、おもしろきことども、なほ並びなし」

と言ふ。白き色紙、青き表紙、黄なる玉の軸なり。絵は、常則、手は、道風なれば、今めかしうをかしげに、目もかかやくまで見ゆ。左は、そのことわりなし。

平安時代には絵入りであったことがわかるが、題名に関しても変遷があり、平安時代には『竹取の翁』『かぐや姫の物語』と呼ばれていたことがわかる。鎌倉時代には『竹取』（『無名草子』）や『たけとり』（『風葉和歌集』）と呼ばれ、室町時代には、『竹取翁』（『河海抄』）と呼ばれていた。

一〇世紀の『大和物語』『宇津保物語』や一一世紀の『栄花物語』『狭衣物語』、また、『源氏物語』で「絵は巨勢相覧、手は紀貫之書けり」と言及されていることから、遅くとも一〇世紀半ばまでに成立したと推定されている。

さらに、関連あるものとしては、『丹後国風土記』、『万葉集』、『今昔物語集』などの文獻、謡曲『羽衣』、昔話『天人女房』『絵姿女房』『竹伐翁』『鳥呑み翁』などが挙げられる。

作者についても不詳であるが、作者像としては当時の推定識字率から庶民は考えづらく、上流階級に属しており、貴族の情報が入手できる平安京近隣に居住し、物語に反体制的要素が認められることから、当時権力を握っていた藤原氏の係累ではないと考えられている。

さらに、漢学・仏教・民間伝承に精通し、仮名文字を操ることができ、和歌の才能もある知識人で、性別は男性だったのではないかと推定されている。『竹取物語』の本文系統が本格的に研究の対象となったのは昭和に入ってからで、一九三〇年（昭和五年）、初めて徳本正俊によつて三系統に分類された。一九三九年（昭和十四年）に新井信之によつて「古本系」「流布本系」の分類が示され、昭和四〇年（一九六五年）に中田剛直がそれまでの研究を受けた上で示した、流布本を三類七種とする分類が現在最も一般的なものとなっている。

伝承性として、かぐや姫が竹の中から生まれたという「異常出生説話」や、かぐや姫が三月で大きくなつたという「急成長説話」、かぐや姫の神異によつて竹取の翁が富み栄えたという「致富長者説話」、複数の求婚者へ難題を課していずれも失敗する「求婚難題説話」、かぐや姫が月へもどるといふ「羽

衣説話」、富士山の地名由来を説き明かす「地名起源説話」など多くの要素を含んでいる。

平安時代後期の『今昔物語集』にも『竹取物語』と同様の説話が採集されているが、求婚者への難題は「空に鳴る雷」「優曇華」「打たぬに鳴る鼓」の三題のみで個人別ではなく、月へ帰る夜も十五夜でなく、富士山の地名起源説話も登場しない。

卷三 第三三話 竹取翁見付女兒養語

今昔、□□天皇の御代に、一人の翁有りけり。竹を取て籠を造て、要する人に与へて、其の功を取て、世を渡けるに、翁、籠を造らむが爲に、篁に行き竹を切けるに、篁の中に一の光り有り。其の竹の節の中に、三寸許なる人有り。

翁、此れを見て思はく、我れ年来竹取つるに、今此る物を見付たる事を喜て、片手には其の小さき人を取り、今片手に竹を荷て、家に返て、妻の傭に、「篁の中にして此る女兒をこそ見付たれ」と云ければ、傭も喜て、初は籠に入れて養けるに、三月許養けるに、例の人に成ぬ。

其の児、長大するまに、世に並び無く端正にして、此の世の人とも思えざりければ、翁・傭、弥よ此れを悲び愛して傳ける間に、此の事、世に聞え高く成てけり。

而る間、翁、亦竹を取らむが爲に篁に行ぬ。竹を取るに、其の度は竹の中に金を見付たり。翁、此れを取て家に返ぬ。然れば、翁、忽に豊に成ぬ。居所に宮殿・楼閣を造て、其れに住み、種々の財庫倉に充ち満てり。眷属、衆多に成ぬ。亦、此の児を儲てより後は、事に触れて思ふ様也。然れば、弥よ愛し傳く事限無し。

『今昔物語集』所収の竹取説話は、口頭伝承されてきた「伝承竹取説話」の古態を伝えているのではないかと考えられている。

『竹取物語』でかぐや姫に求婚する五人の貴族は、いずれも壬申の乱の功臣で天武・持統両天皇に仕えた人物であることから、奈良時代初期が物語の舞台だったと考えられている。また、この時期に富士山が噴気活動中の火山

として描かれていることから、科学論文に成立などが引用されることがある古典のひとつである。

『竹取物語』に似た国外の民間伝承としては、中華人民共和国四川省のアバ・チベット族に伝わる「斑竹姑娘」という物語がある。内容は竹中から生まれた少女が、領主の息子たちから求婚を受けたが難題をつけて退け、かねてより想いを寄せていた男性と結ばれるという話だが、中でも求婚の部分は宝物の数、内容、男性側のやりとりや結末などが非常に『竹取物語』に酷似している。

伊藤清司が原説話が日本とアバ・チベット族に伝播翻案され『竹取物語』と「斑竹姑娘」になった¹としたのに対し、益田勝実は「斑竹姑娘」が所収された『金玉鳳凰』への疑問から翻案説に賛成しない²とし、俗塵にまみれ、悲喜に翻弄されて生きる人間世界の恩愛に苦悶するかぐや姫に独創性をみている。近年は奥津春雄が「斑竹姑娘」の方が『竹取物語』の翻案である³としている。

二、「竹取物語」の言語表現の特徴

『竹取物語』の文体に関しては、仮名文字による創始期の言説であることから、漢文訓読語からの和風化に工夫がある。かぐや姫の人間化が進行するに従って、語りの文体に情愛を呼び覚ます表現が多くなってくる。坂倉篤義は「二種類の文章を用いて書かれていると見ることができ」⁴と指摘している。

ひとつは、「さる時よりなむよばひとは言ひける」「よろづの遊びをぞしける」のように、「……なむ……ける」、または「……ぞ……ける」という様式の文章で、これは、ふつう漢文訓読には用いられない型の文である。この「なむ」あるいは「ぞ」という助詞は、聞き手への確かめの気持を現わすのに用いられるものであり、これに呼応する「けり」という助動詞は、いわば過去を、現在との関連において見る、説明的な陳述をふくむものである。すなわち、これらは、「解説的に物語る」叙述の態度をふくんだ様式の文であって、この様式の文が、和歌や、物語の「心話」

の部分、また日記の地の文などには用いられることほとんどなく、一方、和歌の左注や、歌物語の文章として、さかんに用いられた理由も、ここからして了解される。

さらに、「漢文訓読語として用いられて和文には普通もちいられることのない語や表現も、多数に見いだされる」⁵ことを指摘する。物語の全体の枠組みは「けり」という過去の助動詞で「……たそうだ」という語りの構造をとりつつ、内容部分を漢文訓読体でリズムカルに仕上げていくという手法が取られている。

三、教材としての『竹取物語』

『竹取物語』は小学校、中学校、高等学校の古典教材として段階的に教科書に登場する。小学校国語科教材では、ちいさいころの、かぐや姫がおじいさんとおばあさんに、たいせつに育てられている。むかし話の「かぐやひめ」は、『竹取物語』という物語がもたっている。今から一〇〇〇年以上も前の平安時代に書かれた物語である。『竹取物語』の作者は不明とわかりやすく説明し、原文に関しては冒頭部分を抜き出して音読教材として用いる。

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一すぢありける。あやしがりて、寄りて見るに、つつの中光たり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてゐたり。

古典学習として現代語訳をつけ、仮名遣いの違いを丁寧に学習させる。

・いふもの ↓ 「いふもの」と読む。
 ・よろづ ↓ 「よろづ」と読む。
 ・うつくしう ↓ 「うつくしゅう」と読む。
 ・ゐたり ↓ 「いたり」と読む。
 語頭以外での「は・ひ・ふ・へ・ほ」に関して、「いふもの」「や」「いひける」

のように、語頭以外での「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」は、多くの場合、「は」↓「わ」、「ひ」↓「い」、「ふ」↓「う」、「へ」↓「え」、「ほ」↓「お」と読むことが多い。

この冒頭文の以外からも例を出せば、古文の「けふ」は「きょう」と読む。古文の「てふ」は「ちよう」と読む。古文の「てふてふ」は読みは「ちようちよう」で蝶々（ちようちよう）。「てふてふ」はアゲハチョウとかモンシロチョウなど、昆虫のチョウのことである。

古文の「わ・ぬ・う・ゑ」は、読みが、「わ」↓「わ」（そのまま）、「ぬ」↓「い」、「う」↓「う」（そのまま）、「ゑ」↓「え」、「を」↓「お」というふうになる。

さらに、古語の意味と古典文法について解説がある。「現代と意味のちがう言葉」としては、基本的な古語の説明がある。

・あやしがりて

意味は「不思議に思つて」で、現代の「怪しいと思う」とは意味がちがい、「変だと思う」というような意味はない。

・うつくしう

「うつくし」で、「かわいらしい」という意味。現代の「うつくしい」とは、少し意味がちがうので、注意する。

・ゐたり

「ゐる」（「いる」）の変化で、「ゐる」の意味は「座る」（すわる）という意味となる。現代での「居る」（いる）の意味の「存在している」とは、少し意味がちがうので注意する。「あやし」や「うつくし」のように、たとえ同じ語が現代にあっても、古文では意味が違う場合があるので、注意するよう指導する。

・今は昔

日本の昔話のはじめの決まり文句で、「今となつては昔のことだが」という意味で、この場合は現代で言うところの「むかしむかし」にあたる部分で、読者をおの世界に引き込ませる言葉の一つである。当時の竹は、竹細工などのように、いろんな品物に、材料として使われていた。

・（竹を取り）つつ

「つつ」は、反復・継続の意味の接続助詞で、「竹をとる」という動作と「よるづのことにつかふ」という動作が同時に行われていることをあらわす。

・(あり) けり

過去の助動詞で、助動詞「き」との違いの一つは、「き」が直接経験し記憶にある過去の意味をあらわすのに対し、「けり」は人から伝え聞いたことの回想をあらわすことである。

・(名) をば

格助詞「を」に係助詞「は」が付き、「は」がにごったもので、「を」を強調している。「名をば」の意味は、「名前を」という意味である。

・いと(うつくしう)

「いと」で、現代の「とても」という意味で、古文でよく出てくる言葉なので、おぼえておくように指導する。

・三寸

一寸で、約三センチメートル、三寸で約九センチメートルになる。

・みたり

中学校国語科教材では、小学校国語教材より冒頭を含め分量が多くなるが、古典教材としては、「仮名遣いの違い」「現代と意味のちがう言葉」「現代では使われなくなった言葉」「語の意味」として、古語および古典文法の詳しい学習が出来るようになっていいる。

竹取の翁この子を見つけて後に、竹をとるに、節をへだててよごと金ある竹を見つくること重なりぬ。かくて翁やうやう豊かになりゆく。この児養ふほどに、すすくと大きになりまざる。三月ばかりになる程に、よき程なる人になりぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ裳着す。帳の内よりも出さず、いつき養ふ。この児のかたち清らなること世になく、家の内は暗き処なく光満ちたり。翁心地あしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事も止みぬ。腹だたしきことも慰みけり。

・よ

竹の節と節の間の空洞のことをさす。

・かくて

このようにして、の意となる。

・ほどに

理由や原因をあらわす。

・よき程

かぐや姫は、三か月で十二、三歳のように育ち、成人したことを表す。

・髪上げ

平安時代には女性は成人すると、髪を結び上げた。これを「髪上げ」という。

・裳着

「裳」は女性が腰から下にまとう衣で女性が成人すると、髪上げと同時に裳着の式が行われた。

・世になし

世の中に比類がないという意味である。

・「けり」

文末の「けり」は、過去についての伝聞をあらわす。「けり」は、『竹取物語』のように昔話などで用いられることが多いので覚えておくように指導する。文末の「ける」は、「けり」の連体形で、「ける」になっている理由は、文中に係り助詞「なむ」があるため、文中に、係り助詞「ぞ」・「なむ」・「や」・「か」がある場合、文末は連体形になる。なお、文中に係り助詞「こそ」がある場合、文末は已然形になる。「ける」の意味は、連体形になっても「けり」と同じであり、過去についての伝聞をあらわす。

高等学校国語科教材では、冒頭部分について「名をば、さぬきの造となむ言ひける。」「その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。」の二つの係り結びに対して「なぜ係り結びを使用するのか」を教師は説明し、教えていかなければならない。さらに、「翁の名前をなぜ語るのか」といった課題発見を促す発問が加えられる。古文に対する課題発見は、現代文に対する課題発見より内容が深くなることが多い。『竹取物語』の最大の謎は「罪」の問題である。王と思われる天人が翁に向かって「かぐや姫は月の都にて罪を犯した」ので地上に滞在したというのである。

その中に王とおぼしき人、家に、『造麻呂、まうで来』と言ふに、猛く思ひつる造麻呂も、物に酔ひたる心地して、うつぶしに伏せり。

言はく、『なんぢ、幼き人、いささかなる功德を翁つくりけるによりて、なんぢが助けにとて、片時のほどとて降ししを、そこらの年頃、そこらの金賜ひて、身を変へたるがごとかりたり。かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、かくいやしきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。罪のかぎり果てぬれば、かく迎ふるを、翁は泣き嘆く、能はぬことなり。はや返し奉れ』と言ふ。

かぐや姫の犯した「罪」とは何か。スタジオジブリ製作『かぐや姫の物語』のキャッチコピーは「姫の犯した罪と罰」である。月の世界から降ろされたについて高畑勲氏は『今昔物語』の娘は、美しいけれども全然人間のじゃないのに対し、かぐや姫の心を描いているのが『竹取物語』の大きな特徴です」と述べている。

かぐや姫「罪」だの昔の「契り」だののために地上におろされた、という原作の言葉から、『なぜ、何のために、かぐや姫は地上にやってきたのか』を読み解けばよい。

高畑勲氏の「月と地球の違い」というヒントは、『竹取物語』という古文教材の新しい課題として導入したい問題である。かぐや姫は天上界の罪人であり、かぐや姫の犯した罪の意味を考えることは、地上でのかぐや姫の人間らしさを発見することから読み取ることができる。

高等学校の選択科目では今後、「文学国語」に加えて「論理国語」という科目が新設されることになっている。高等学校の選択科目「論理国語」はどのように運用されるのだろうか。橋本陽介氏は、「国語」の考え方に一つの新しい方向性を示している⁷⁾。

グローバル化や情報化が進むこれからの社会においては、立場や考えの異なる他者との的確な意思疎通や共通理解、課題を発見しその解決を

導いていくための創造性や合理性を重視した他者との協働などがより重要になると考えられる。

「論理国語」で大切なことは、情報に対して常に「なぜ」という課題発見ができ、そこからさらに「なぜそう言えるのか」と思考を発展させることである。

おわりに

平成二〇年度公示の学習指導要領で、「文学的な文章の解釈に関する指導事項」では「低学年では場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと、中学校では登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基にして読むこと、高等学校では登場人物の相互関係や心情、場面についての描写をとらえてよむこと」となっている。古典文学教材についても、学年が上がるにつれて人物の性格や心情、場面の情況を読み取ることが目標とされる。

古典指導で重要なことは「古典に親しませる」工夫をすることである。文部科学省は「古典の指導については、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する」（『中学校学習指導要領解説―国語編―』二〇〇八年七月）と述べ、二〇一五年一部改正の「伝統的な言語文化に関する事項」においても「古典の世界に触れる」「古典の世界を楽しむ」「古典を読み、その世界に親しむ」を挙げている。古典はおもしろいと生徒に興味・関心を持たせるには、原文を語彙・文法・現代語訳で読ませる学習を中心としながらも、古典に慣れ親しむことが重要である。

古典に親しむには、古典学習に対する生徒の「主体性」「協働性」を重視した授業が展開されることが望まれる。「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業方法として、「知識構成型ジグソー法」が、東京大学発教育支援コンソーシアム推進機構が開催するシンポジウムで報告された。「知識構成型ジグソー法」とは「人がわかるということはどういうことか」という認知科学の観点に立ち、児童・生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現す

るなかで、古典学習の目的である「古典を読解する力」「古典に関する知識」「古典への興味・関心」を育成する。クラス全体でのクレストークを通して自分の考えを深め、最後に、一人ひとりがりフレクション・シートに課題に対する自分の考えをまとめる。

「知識構成型ジグソー法」とは「生徒に課題を提示し、課題解決の手がかりとなる知識を与えて、その部品を組み合わせる事によって答えを作り上げるという活動を中心にした授業デザイン的手法」¹⁰であり、古典学習に有効である。

『竹取物語』から五人の貴族である石作皇子、庫持皇子、右大臣阿倍御主人、大納言大伴御行、中納言石上麻呂と御門の求婚という課題を取り上げ、「知識構成型ジグソー法」によって協働学習を実践する。かぐや姫の難題とは石作皇子には「仏の御石の鉢」、庫持皇子には「蓬萊の玉の枝」、右大臣阿倍御主人には「火鼠の裘」、大納言大伴御行には「龍の首の珠」、中納言石上麻呂には「燕の子安貝」を持って来させるというものだった。どれも話にしかなかない珍しい宝ばかりで、手に入れるのは困難だったことを五グループに分かれて調査する。

江戸時代の国文学者・加納諸平は、『竹取物語』中のかぐや姫に言い寄る五人の貴族が『公卿補任』の文武天皇五年（七〇一年）に記されている公卿にそっくりだと指摘した。諸平は、阿倍御主人、大伴御行、石上麻呂は実在の人物であり、庫持皇子のモデルは、天智天皇の落胤との説があり母の姓が「庫持」である藤原不比等、石作皇子のモデルは、宣化天皇の四世孫で「石作」氏と同族だった多治比嶋だと述べている。結局、かぐや姫が出した難題をこなした者は誰一人としていなかったのである。

アクティブ・ラーニングを可能にするには、古典の言語表現が現代のわたしたちの言語生活とどのようにつながっているのかを、児童・生徒一人ひとりが実感できるような文学教材を取り上げることが大切である。

* 『竹取物語』の本文は、片桐洋一校注・訳『新編日本古典文学全集』¹ 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語 小学館一九九四年、野口元大校注『新潮日本古典集成（新装版）竹取物語』新潮社二〇一四年、坂倉篤義校訂『竹

取物語』岩波文庫一九七〇年、室伏信助訳注『新版 竹取物語』角川ソフィア文庫二〇〇一年、武田智宏を参照した。

註

- 1 伊藤清司『かぐや姫の誕生―古代説話の起源』講談社現代新書一九七三年
- 2 益田勝実『斑竹姑娘』の性格―『竹取物語』とのかかわりで、『法政大文学部紀要』33一九八七年
- 3 奥津春雄『竹取物語の研究―達成と変容』翰林書房二〇〇〇年
- 4 坂倉篤義「解説」『竹取物語』岩波文庫一九七〇年八七頁
- 5 坂倉篤義「解説」同掲書、八八頁。
- 6 高畑勲『ジブリの教科書19かぐや姫の物語』文春文庫二〇一八年六一頁
- 7 橋本陽介『使える！「国語」の考え方』ちくま新書二〇一九年一八三頁
- 8 米田猛氏は「国語科教では指導者が教材に惚れ込むことが学習者の学習意欲に大きく影響する」と指摘している。「生徒をとらえる古典指導のあり方」『月刊国語教育』明治図書、二〇〇六年一〇月、四〇頁。
- 9 略称はOREE。大学の知を教育現場に生かすことを目的として結成された組織で、二〇一〇年から全国の教育委員会や学校とアクティブ・ラーニングの研究連携を実施している。
- 10 三宅なほみ「協調学習」の考え方」三宅なほみ・東京大学OREE編『協調学習とは―対話を通して理解を深めるアクティブ・ラーニング型授業―』北大路書房、二〇一六年三月、九頁。

**A study on Japanese language art education
—A verbal expression of Teketori Monogatari—**

Keiko OGIHARA

Course of Principal Human Sciences, Department of Human Development,

Faculty of Humanities, Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

No English abstract